

南の風

Shaplaneer
since 1972

vol. 294
2021. December

পলিথিন ও প্লাস্টিকের পরিবর্তে
কাপড়ের বা চটের ব্যাগ ব্যবহার করুন



特集

三助を連携させて培った防災力

～サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト終了報告～

No to Single Use Plastic

Published by JJS in Cooperation with SHAPLA NEER and Funding from MEXT

পানির
সীমি



Please

三助を連携させて培った防災力

～サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト終了報告～

バングラデシュは毎年サイクロンに見舞われ、たびたび大きな被害が発生します。サイクロン(注)の襲来は止められなくとも、防災行動を学び、行動を定着させることで被害を最小化することはできます。2017年からサイクロン常襲地域において行政、地域、住民の三者が連携して地域の防災能力を強化していくための事業を実施してきました。2020年3月から拡大したCOVID-19感染拡大を踏まえ、活動内容を追加し事業延長するなど柔軟に対応をしながら、2021年6月に事業が終了を迎えました。本特集では、プロジェクトによってもたらされた地域や人々の変化や事業の成果、そしてこれからの展望についてお伝えします。

(注) インド洋や太平洋南部で発生する熱帯低気圧。バングラデシュは度々大きな被害を被っている。

事業名……………サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト
 事業期間……………2017年10月～2021年6月(3年9カ月)
 事業地域……………バングラデシュ バゲルハット県シヨロンコラ郡、モレルゴンジ郡
 裨益者……………約70,000人
 事業予算……………約4,200万円
 パートナー団体 ……JJS (ジェイ・ジェイ・エス/Jagrata Juba Shangha)



1 災害管理委員会メンバーが年間活動計画を策定している様子 2 バングラデシュ版ぼうさい甲子園で発表をする生徒たち 3 避難訓練を行う住民たち 4 国際防災の日を実施したアートコンペに参加した子どもたちとその作品

Contents

特集

三助を連携させて培った防災力

～サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト終了報告～

- 4 サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト 大解剖
- 5 プロジェクトの要となる人々や組織
- 6 終了時評価から見てきたこと
- 7 地域に生まれた変化
- 8 より良い復興へ
サイクロン常襲地域だからこそ必要な支援の形

9 この人に聞きたい
「と」の力で持続可能な社会をつくる
コモンズ投信株式会社取締役会長 渋澤 健さん

12 在留ネパール人向けオンラインイベントを実施しました

13 広がれ、ステナイ生活の輪！
回収キャンペーン協働先をご紹介します

14 プロジェクトニュース
青少年による生活スタイルの見直しと実践

16 理事・評議員からのメッセージ
アジアが町にやって来た ～ディアン君への手紙～
評議員 横田 昌子

19 新団体ロゴ策定ワークショップを開催しました

20 シャプラバ
シャプラニールを通じて自分たちにできることから
コープ自然派兵庫 組合員理事 有吉 真紀さん 川中 美咲さん

21 シャプラ文化部
白くてまぶしい、ジャナキ寺院

22 スタッフの想い
シャプラニールとの長い旅
ネパール事務所 プログラムオフィサー スリジャナ・シュレスタ

24 クラフトリンク
#Who_is_She? ネパール生産者のいま

26 ツナガル掲示板
答えのない課題に向き合う 田中 未桜さん(シャプラニール・ユースチーム)
知ることは佳きかな 春川 嘉孝さん(マンスリーサポーター)

27 お知らせ



持続可能な生活スタイルの実践をする青少年グループの皆さん。エコバッグの利用促進や節水を呼びかけるポスターを自作しました。ポスターは地元の学校で使われる予定。(バングラデシュ、2021年)



「誰も取り残さない。」

社会のさまざまな制度や仕組みから取り残され、すべての人が持つ豊かな可能性が奪われてしまうことがあります。

私たちは人に寄り添い自らも当事者になることで社会課題の解決を進めています。

貧困のない社会の実現をめざして。

南の風 通巻294号(季刊)
2021年12月1日発行

発行元 特定非営利活動法人
シャプラニール=市民による海外協力の会
 発行人 坂口和隆
 編集長 小松豊明
 編集 京井杏奈 長瀬桃子 宮原麻季
 デザイン 柴田篤元(matricaria.)
 印刷 株式会社上毛印刷

東京事務所
(火曜から土曜10:00～18:00/日曜、月曜、祝日定休)
〒169-8611
東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863 FAX 03-3202-4593
Email info@shaplaneer.org
Web https://www.shaplaneer.org/

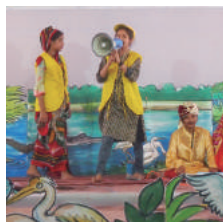
プロジェクトの要となる人々や組織

三助の連携の要となる役割を果たすのが「**ユニオン災害管理委員会**」「**郡災害管理委員会**」「**学校**」です。3年9カ月の事業の中ではさまざまな活動を通じて能力強化や連携をはかりました。この要となる三者について紹介をします。

1 ユニオン災害管理委員会は、人口3万人程度の最も小さな行政単位であるユニオン毎に設置することが決められている防災組織です。役割の一例としては、地域の災害管理計画書の策定やそのための世帯数の把握などの情報整理です。そのほかにもサイクロン発生時の避難場所となるサイクロンシェルターの維持管理を行うサイクロンシェルター管理委員会との連携や活動状況の把握をして、避難誘導の仕組みを整えることも求められています。また、実際に被害が発生した際は域内の被災状況を取りまとめ、郡災害管理委員会に報告する役割などもあります。

2 郡災害管理委員会は、ユニオンの一つ上の行政単位である郡に設置される災害管理委員会です。郡に配置される郡災害管理委員会は郡内にあるユニオン災害管理委員会からの要請や計画を取りまとめて上位レベルの県災害管理委員会に報告し、物資や資金の配分といった役割を担っています。

3 学校は、本プロジェクトの中で世帯やコミュニティに啓発や行動変容の波及効果を促す役割を担います。学校では、中学校とマドラサ（イスラム神学校）の7年生を対象とした課外授業として防災教育のセッションを実施したり、経験共有や各学校の取り組みを発表する場としてのバングラデシュ版の「ぼうさい甲子園」（注）を企画実施したりしました。ぼうさい甲子園で発表された防災行動をテーマにした演劇の様子



（注）正式には1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」。阪神・淡路大震災の経験と教訓を未来に継承するために兵庫県などが主催し、学校や地域で防災教育や防災活動に取り組む子どもたちや学生を全国から募集し、顕彰する日本の事業。

災害管理委員会のメンバーの声

災害管理委員会のメンバーになって振り返って感じることは、プロジェクトが始まる前までは、委員会の役割について十分に理解できていなかったように思います。ただ、サイクロンは私たちの生活に大きな被害を与える脅威なので、どうにかしなくてはならないという気持ちはありました。

防災研修を受講したり、地域で防災訓練を実施したりして地域の人々が防災に参加できる機会を作り出すなど、今までにやったことのない活動を通して、防災管理委員会の役割を理解できたと思います。これからも委員会のメンバーと定例会議などを実施し、話し合いをしながら地域の防災力向上に努めていきたいと思っています。



年間活動計画を策定する会議の様子

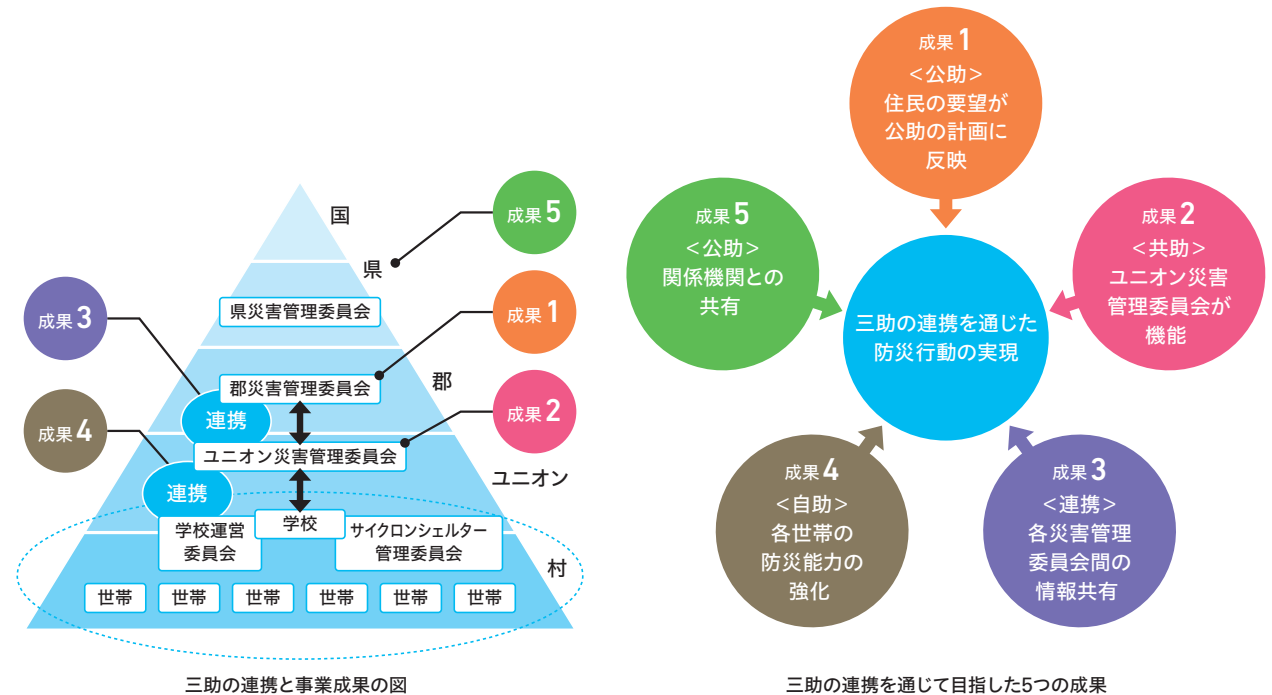
学校で防災教育を学んだ生徒の声

7年生の授業で防災教育を受講しました。今まではサイクロンが来る前の準備について何も知りませんでしたし、考えたこともありませんでした。でも授業を受けて何をすべきか分かるようになりましたし、非常持ち出し袋も今は準備しています。また一緒に防災授業を受けた友達と、家族や近所の人に定期的に青空教室のようなことを企画し、習ったことを伝えていきます。

サイクロンに強い地域・人づくりプロジェクト

大 解 剖

本事業では、サイクロン防災にかかわる人々や組織の役割を丁寧に整理しそれぞれの役割を理解し、それぞれの人々が担う役割を連携させることを目標にしました。人々がどのようにして命を守る活動を行ってきたのかをお伝えします。



事業地であるシヨロンコラ郡とモレルゴンジ郡は、バングラデシュ南西部のベンガル湾に面しています。いずれも大きな川に面した沿岸地域で、支流が網の目のように入り組んでおり、サイクロンだけでなく低気圧にもともなう高潮や河岸浸食の被害を受けやすい特徴があります。また塩害も受けやすく、平時においても人々の飲料水の確保が困難であり、主な産業の一つである農業の生産性がなかなかあがらない原因の一つとなっている脆弱性の高い地域です。しかし、シャプラニールは2012年から2014年に実施した前フェーズで、ユニオン災害管理委員会と学校を主なターゲットとした事業を展開し、一定の成果を得ました。そして、地域の防災力向上に学校とユニオン・郡災害管理委員会の連携が肝要という学びを得たこともあり、これらの災害への脆弱度が高い地域で事業を実施するにいたりしました。

サイクロンからの被害を軽減させるために、個人や世帯レベルの防災力や、行政の防災力がそれぞれ強化されていくことが大事ですが、これに加えて防災にかかわるそれぞれの立場の人々や組織・団体などが連携していくこともまた重要と考えています。世帯や個人を自助・地域活動を共助、行政・自治体を公助と分類し、「自助・共助・公助」のいわゆる三助の連携を促すことを目指しました。本プロジェクトの最終的な目標はこの連携を通じて日々の防災活動やサイクロン襲来時の避難活動が円滑に実施されることで、これに到達するために、5つの目標を掲げて活動をしてきました。

地域に生まれた変化

報告／宮原 麻季(海外活動グループ)

プロジェクトを実施する際に、シャブラニールの介入が終了した後も地域の人々が主体的に事業成果を継続できるだろうか、という点が重要であると考えます。特にこの地域では毎年のようにサイクロンが来襲するからこそ、この持続性が担保されることとが殊の外重要で、

本プロジェクトでは災害管理委員会の能力が強化されたことが成果として評価されました。前述の通りバングラデシュの防災法では「災害管理業務規程」があります。現場の声を上位行政に伝えるボトムアップ型の視点を取り入れた枠組みといえるもので、コミュニティと行政が協働して防災体制を整えていく防災のトレンドにも沿ったものです。しかしながら、この枠組みが機能していないというのが大きな課題の一つでした。

枠組みが機能している一つの例として、事業実施前は会議が有効に実施されていなかったのが、会議が実施され出席率が高くなったことを見ると、話し合われるべき議題が整理されており、メンバーが会議の重要性を理解しているといえるのではないのでしょうか。実際に災害管理委員会が専用の銀行口座を開設し、資金を調達し、その資金が災害時に活用されている例も見ら



サイクロン・アンファン襲来時の浸水してしまった地域の様子



学校での防災教育授業での学びを発表する生徒たち

れていることからそのように考えられます。また、災害管理委員会のメンバーがサイクロン発生時の避難活動での功績を国から表彰されたこともあり、周辺地域の防災関係者が事業地を視察に来るなど、注目されている取り組みとなっています。

このような災害管理委員会の運営能力の定着はまさに事業効果の持続性に資すると考えます。プロジェクト地域では災害管理委員会だけでなく、学校の生徒の働きかけも地域に大きな変化を生み出しています。生徒たちによって地域の人びとが日々の生活の中で防災行動を意識するようになり、実践し始めています。

報告によると2021年のサイクロン・ヤス、2020年サイクロン・アンファンでは住民は適切な避難行動をとっており、今後も、このような避難行動を実践する経験が積み重なっていくことが予測されます。もしかしらば、将来、防災活動や避難行動から見えてくる新たな課題があるかもしれません。その時にその改善にむけた住民の要望の受け皿として、災害管理委員会が改善策を講じる仕組みが根付きつつあります。今後地域の防災力が螺旋階段のように向上していくことが期待されています。

終了時評価から見えてきたこと

2017年10月から開始した事業が2021年6月に終了を迎えるにあたり、事業の成果や達成を確認する終了時評価を実施しました。本プロジェクトの担当者として事業にかかわり、2018年には来日し日本での講演会にも登壇したモハマド・アニスザマン職員が評価から見えてきた成果をご報告します。



バングラデシュ事務所
プログラムオフィサー
モハマド・
アニスザマン

終了時評価から見えてきた特筆すべきことは、各災害管理委員会の能力の向上が挙げられます。バングラデシュの防災法では「災害管理業務規程」という各行政単位で防災分野においてすべきことが定められており、災害管理委員会の組織化と活動はこれに基づくものです。

プロジェクト開始当初は災害管理委員会が自主的に会議を開くことも少なく、出席率も50%以下という低いものでしたが、今では80%を超え、自分たちの権限と責任をもって防災活動、定例会議の開催、資金調達、県・郡・ユニオンの各災害委員会間の調整などを行っています。

例えば、資金調達では、行政が地域の防災活動を実施するための年間予算を割り当てるようになり、ユニオン災害管理委員会は予算を確保できるようになりました。これは災害管理委員会がユニオンに地域の実情を共有し、災害管理計画を提出し、理解を得られたからこそその結果で、プロジェクト開始時には見られなかったことです。またユニオン災害管理委員会が自ら実施する資金調達イベントも初めて実施されました。

加えて多様な連携が生まれたのもプロジェクトの成果といえます。県・郡・ユニオンの各レベルの災害管理委員会の間の縦のコミュニケーションが取れるようになったことや地域の内部においても防災にかかわる関係者や住民と横のつながりが構築され、強化されていきました。その結果、事業期間

中に発生した4つのサイクロンにおいても、それぞれが確かな防災・避難行動をとったことで人的被害を防ぐことができました。こうしたユニオン災害管理委員会の積極的な取り組みは他地域の防災委員会からの視察を受けるまで注目されるようになっています。

もう一つ印象的だった成果は、学校での防災教育を通じて生徒や教師たちにもサイクロン災害への備えを自分事として意識してもらうようになったことです。生徒たちはコミュニティの人々に防災に対する啓発メッセージを広めるための活動を行いました。教師の中には継続して、防災教育の授業を実施したり、年間のスポーツや文化イベントで防災の問題を取り上げたりする人もいます。Durjog Prostuti Mela (日本の「ぼうさい甲子園」をバングラデシュ版として実施した防災イベント)では、対象学校の生徒が参加し、ステージ演劇やプレゼンテーションを通じて学校の防災の年間計画やさまざまな取り組みを発表しました。このイベントの成果は、地域住民、プロジェクト関係者、地方や国レベルのメディアから高く評価されました。

こうした取り組みは地域全体の防災力を高め、災害に強いコミュニティをつくることにつながり、素晴らしい成果があったと言えます。



ユニオン災害管理委員会によるファンドレイジング(資金調達)イベント